九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Role of autotransplantation in the treatment of acute promyelocytic leukemia patients in remission : Fukuoka BMT Group observations and a literature review

上村, 智彦

https://doi.org/10.15017/1485073

出版情報：九州大学, 2014, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏　　名：上　村　智　彦

論 文 名：Role of autotransplantation in the treatment of acute promyelocytic leukemia patients in remission: Fukuoka BMT Group observations and a literature review
（急性前骨髄球性白血病の寛解期における自家造血幹細胞移植の意義：福岡 BMT グループの経験と文献的考察）

区　　分：乙

論　文　内　容　の　要　旨

我々は，1992 年から 2008 年に第 1 寛解期（1st complete remission, CR1）または第 2 寛解期（CR2）の急性前骨髄球性白血病（acute promyelocytic leukemia, APL）に対して，福岡血液移植グループ（Fukuoka Blood and Marrow Transplantation Group）の 7 施設で自家末梢血幹細胞移植（autologous peripheral blood stem cell transplantation, auto-PBSCT）を施行された 26 例を後方視的に解析した．全例が *all-trans* retinoic acid（ATRA）を含む寛解導入療法を受けていた．CR1 の 20 例は，2 回の地固め療法後に auto-PBSCT を施行され，5 例は WBC 10000/μl 以上の高リスク群，15 例は WBC 10000/μl 未満の低リスクだった．CR2 で auto-PBSCT を施行された 6 例は，初診時 WBC 10000/μl 未満の低リスクであったが，3 回の地固め療法と 2 年間の維持療法後に再発し，再寛解導入療法と地固め療法により分子遺伝学的 CR に到達した後，CR2 で auto-PBSCT を施行された．26 例における生着は速やかで，治療関連死亡は認められなかった．CR1 で auto-PBSCT を施行された 20 例は移植後の観察期間中央値 133 ヶ月（73- 193 ヶ月），CR2 で auto-PBSCT を施行された 6 例は観察期間中央値 41 ヶ月（2- 187 ヶ月）で，維持療法を施行されずに CR を維持していた．PML/RARα キメラ mRNA は，auto-PBSCT 前の末梢血幹細胞および骨髄から検出されなかった．少数例の検討ではあるが，我々の後方視的検討は，auto-PBSCT が高リスク APL 治療において，CR を長期間維持する有効な治療選択であることを示唆している．我々は，先行研究を文献的に検討し，寛解期 APL における自家造血幹細胞移植（自家移植）の意義について考察した．